

英語力、思考力、精神力が鍛えられると出場者が実感

埼玉県の公立高校2校が 英語ディベートの国際大会に出場！

埼玉県高等学校英語教育研究会は、生徒が主役となり、英語を意欲的に学習する授業づくりを目指し、様々な挑戦をしている。その1つとして力を入れているのが、英語ディベートの指導だ。今回は、全国大会でも上位入賞の常連校であるさいたま市立浦和高校と埼玉県立浦和高校が、海外で行われた英語ディベートの国際大会に出場した模様をレポートする。

高校から英語ディベートを 始めたメンバーが国際大会に出場

全国高校英語ディベート連盟 (HENDA) が主催する「全国高校生英語ディベート大会」(以下、全国大会。*1)の優勝チームには、主にアジアの国々が出場する英語ディベートの国際大会「Asia World Schools Debating Championships (AWSDC)」(図1)の出場権が与えられる。埼玉県・さいたま市立浦和高校のインタースクールド部は、2015年12月に行われた全国大会で優勝し、16年7月にタイで開催さ

れたAWSDCに出場した。部長の野内瑛里さんは、次のような意気込みを持ってAWSDCに臨んだという。

「本校は、10年度の全国大会で優勝し、スコットランドで開かれた世界大会に出場しました。その時には1勝もできなかったと聞き、先輩の分も勝ちたいと、メンバーで力を合わせて準備を進めていきました」

指導者として2回目の国際大会出場となった顧問の浜野清澄先生は、生徒の入部時から、国際大会出場を見据えて英語力の強化を図ってきた。「部員は学校教育のみで英語を学んできた者が多く、皆、入部してから英語ディベートを始めました。そん

な生徒たちでも、世界で通用する英語を話せるよう、指導してきました」

勝利への壁となっていたのは、ディベート形式の違いだ。全国大会は、大会前に論題が提示される準備型で行われるが、AWSDCでは、試合直前に論題が提示され、その場で立論する即興型が採られている。同部は、国内の即興型ディベート大会でも上位入賞を果たしていたが、準備型を中心に活動しているため、慣れずに苦労したと、嶋村綾さんは振り返る。「私たちのチームには、帰国子女が1人もいません。その場で英語で立論するスピードや、相手の論点をしっかり聞き取るリスニング力に不安を

感じました。さらに、論題には政治、経済、環境などが取り上げられるので、それらの知識や教養を深める必要もありました」

練習として16年3月に出場した即興型ディベートの国内大会では、同じくAWSDCに出場する全国選抜メンバー(本誌16年10月号P.50〜53参照)と対戦し完敗した。危機感を抱いた同部は、即興型ディベートに取り組むOBの大学生から指導を受け、即興型ディベートを学び直した。インタースクールド部に公開されている過去の大会の動画を教材に、相手のスピーチを聞き取って反論を述べる練習を重ね、リスニング力も鍛えていった。

*1 2006年12月に初めて開かれ、16年度で11回を迎えた。詳しくは、全国高校英語ディベート連盟(HENDA)のウェブサイトをご覧ください。<http://henda.global/>



教諭
浜野清澄
はまの・きよすみ
教職歴21年。同校に赴任して15年目。英語科。インターアクト部顧問。

3年生

野内瑛里

やない・えり
インターアクト部部長。AWSDCではAチームリーダー。

3年生

嶋村綾

しまむら・あや
インターアクト部。AWSDCではAチーム。

3年生

松本紗季

まつもと・さき
インターアクト部。AWSDCではAチーム。

3年生

大澤賢

おおさわ・けん
インターアクト部。AWSDCではBチームリーダー。

3年生

玉村優奈

たまむら・ゆな
インターアクト部。AWSDCではBチーム。

3年生

長江佳乃

ながえ・よしの
インターアクト部。AWSDCではBチーム。

3年生

浅倉裕登

あさくら・ゆうた
インターアクト部。AWSDCではサポートメンバー。

図1 AWSDC (Asia World Schools Debating Championships) 概要

会場 タイ・バンコク **期間** 2016年7月6～11日

参加国 南アフリカ、台湾、マレーシア、タイ、中国、日本、バングラデシュ、インドネシア、シンガポール、韓国、スリランカ、インドの12か国。1か国で複数のチームが出場。さいたま市立浦和高校からは2チームが出場。

試合方式 予選6試合を行い、上位8チームが決勝戦に進出。即興型ディベートで、試合開始1時間前に論題が発表される。論題は「This House believe that doctors should be allowed to strike. (医者がストライキをすることを認めるべきである)」のほか、政治、経済、環境など多岐にわたる。3人のジャッジがポート(投票)した数が多いチームの勝利。

戦績 Aチーム6戦2勝6ポート、Bチーム6戦1勝3ポート



写真1 さいたま市立浦和高校のチームは、日本の大会とは異なる雰囲気や圧迫されつつ、試合を重ねるうちに普段通りのディベートができるようになっていった。

試合を通して、英語力や思考力、精神力が大きく向上

大会には3人1組で2チームが出場。まず、予選が2日間行われ、各チーム6試合を戦った。松本紗季さんは、試合中、他国の出場者との英語力の差を何度も痛感したと言う。

「私のスピーチ後、ジャッジに『あなたの英語は分からない』と言われる、とてもショックでした。リスニングも、相手のスピーチの趣旨は分かっても、細かい部分聞き取れず、論旨のずれた反論になっていました」
予想を超える国際大会のレベルの高さに圧倒され、初めは戸惑った。

しかし、試合を重ねるうちに練習してきたことが発揮できるようになり、また、ジャッジの講評も参考にして修正を図っていった。そして、Aチームは3試合目で初勝利をもぎ取った。

2日目は、1日目の反省を生かし、気持ちを強く持って試合に臨んだ。

「ジャッジに渋い顔をされたからといって諦めたら、そこで終わりです。挽回のチャンスがあるかもしれないと、何があっても冷静にスピーチを続けました」(長江佳乃さん)

Bチームは、先生と相談して、メンバーのポジションを変えた。

「今までやったことのないポジションでしたが、意外にもうまくいきました。行き詰まったら、それまでの方法にとらわれずに思い切って変えることも大切なのだ学びました」(玉村優奈さん)

徐々に耳が慣れ、対戦相手の英語も聞き取れるようになり、Bチームも勝利を収めた。

「5試合目は、自分たちの主張を何度も確認し、相手の論もしっかり聞き取れたので、的確に反論できました。6試合中最もスムーズに進んだ試合で、勝ててよかったです」

— AWSDC に出場して —

- 大会では、自分から積極的に話しかけて、外国の友人もできました。いろいろな国の人と交流して考え始めたのが、どうすれば多様な文化を背景に持つ人々が共生できるのだろうということです。それを大学で学びたいと思い、進路を考え直しています。(野内さん)
- 他国の出場者は、皆、自信を持ってスピーチをしていました。そうした態度も含めて、世界で主張していくためには、相手を納得させられる術を身につけなければならないと思います。アジアには英語が母国語の国は少なく、いろいろな英語を話す人がいる中で日本の主張を伝えていくために、対話力をもっと磨きたいと思います。(嶋村さん)
- 国際大会に挑戦して、自分の英語力がまだまだだと感じました。どうすれば日本人の英語力が高まるのか、大学で勉強し、教師になって、子どもたちの英語力を育てていきたいと思います。(松本さん)
- 大会後、友人との会話の中で、自然とうなずいたり、首をかしげたりしている自分に気づきました。相手の発言をうのみにするのではなく、深く考えよう、調べてみようという態度になり、自分が発言をする時も、筋が通っているか、自分がそう思う根拠は何かを考えるようになりました。(大澤さん)
- ディベートの活動を通じて感じたのは、社会が求めているのは、ただ英語を話せる人ではなく、深い思考力を持つ人なのということです。日本のメディアだけでなく、海外のラジオを聴くようになり、受験勉強ということだけでなく、教養を高めるためにも英語の学習を続けたいと思います。(玉村さん)
- 英語が話せるだけでは、コミュニケーションを取るのには難しいと気づきました。対話を続けるためには、相手の話に応じて、自分の考えを話すことが大事です。相手の文化や価値観についての知識も必要であり、会話力をもっと身につけたいと思いました。(長江さん)
- 入試対策として小論文を初めて書いた時、自分が思っていたよりもすらすらと書いてびっくりしました。ディベートで何度も立論をしていたおかげだと思えます。時事問題も勉強していますが、まだ自分の考えを深く語れるほどではありません。大学ではそこを突き詰めて学びたいと考えています。(浅倉さん)

(浅倉裕登さん)
予選で敗退はしたが、海外勢に勝ち星を挙げることができ、チームは大きな手応えを得た。
「他国の出場者も英語のネイティブスピーカーではありませんから、日本にも勝ち上がるチャンスはあるはずです。私たちの経験を次の出場者

に伝えることで、日本チームが世界レベルに近づいていってほしいと思います」(大澤賢さん)
英語ディベートの経験を通して、生徒は様々な力を伸ばしていき、浜野先生は実感している。
「ディベートでは、物事を両面から捉え、各面を冷静に分析し、それに

基づいた考えを言葉で表現して、相手を納得させる力が求められます。ディベートを通して、相手の主張を理解し、それに対する自分の意見を伝えて、物事を論理的に解決していく、そうした人材を育てていきたいと思えます」(浜野先生)

全米最大の団体が主催する ディベート大会に挑戦

埼玉県立浦和高校の英語部が出場したのは、全米最大のスピーチ・ディベート競技団体NFL(The National Forensic League)が主催したディベート大会だ。部長の幅裕斗さんら2人が、15年6月に大分県で行われたNFL(*2)主催の日本大会で優勝し、16年6月開催の全米大会に出場する日本代表4チームのうちの1チームに選ばれた。

NFLの大会はPublic Forum(*3)というディベート方式で行われ、2人1組のチーム対抗となる。日本の主なディベート大会は日本の高校生が出場者が主体となるため、帰国子女の出場枠が制限されているが、この大会は主催がアメリカの団体であ

り、全米大会の出場者はアメリカ各地の地区代表が中心となるため、そういった制限がない。幅さんは小学6年生から4年間、アメリカに住んだ経験があり、英語力は申し分なさそうに思えるが、もう1人のメンバーとともにネイティブスピーカーではないため、アメリカ人との対戦は大きな挑戦だった。

また、論題は大会2か月前に提示されたが、それはアメリカ大統領選挙の予備選挙に関するものだった。日本の高校生には全くなじみのないテーマであったため、資料探しに苦戦したという。

「自分たちの立論だけでなく、相手の主張を予想して、反論できる準備もおこななければなりません。ジャッジが論拠を求める場面もあるので、そのための資料を準備する必要があるました。自分の主張を裏づける内容を英語の資料から探すのは大変で、部活動の時間だけでなく、家でも準備を進めました」(幅さん)
英語部顧問の小河園子先生は、幅さんの努力をこうたたえる。

「幅さんは小学校高学年で渡米したので、日本チームの中で英語力が特

* 2 NFLの日本版の大会を運営する組織。NFLJの大会で勝ち進めば、アジア大会やアメリカでのインターナショナル大会に出場することができる。 * 3 2人1組のチーム対抗で、時事問題を論題にディベートを行う。First Speakerの立論→質疑応答→Second Speakerの立論→質疑応答→要約→Grand Crossfire(4人での議論)→最終立論という順番で進める。



教諭
小河 優子
おがわ・そのこ
教職歴33年。同校に赴任して9年目。国際交流部主任。英語部顧問。英語科。

3年生
幅 裕斗
はば・ゆうと
英語部部长。

図2 NSDA (National Speech and Debate Association) 米国大会概要

会場 アメリカ・ユタ州ソルトレーク市 **期間** 2016年6月13～17日
論題 On balance, it is beneficial to have one day primary for Presidential Election. (アメリカ大統領選挙の予備選挙を1日にまとめて行うようにすべきであるか、否か)
試合方式 全米の地区代表と海外代表の計285チームによる予選を行い、上位64チームが決勝に進出。さらに、ベスト64に残らなかった米国チームの中で改めて登録したチームと、海外チームによる国際部門も実施。予選の上位16チームが決勝トーナメントに進出。
戦績 本選は6戦1勝4敗1引き分けて予選敗退。国際部門は4戦3勝1敗で予選通過。決勝トーナメントは1回戦で敗退。ベスト16。

段高いわけではないことを本人も自覚しており、日本チーム全体を指導していたアメリカ人や「EJ」の日本支部の代表者に自ら質問するなど、人一倍努力をしていました。そうした姿勢は、周りのメンバーの意識を変えていき、より綿密に準備をするこ

納得できないことがあっても
最後まで聞く姿勢がついた

全米大会には、全米の地区代表と海外代表の計285チームが出場(図2)。あまりの規模の大きさに圧倒されつつも、幅さんたちは冷静だった。

写真2 2人が本番で見せた思い切りのよさや、冷静に本質を突く試合運びは、小河先生も驚くほどだったという。

「英語母語話者がどのようにディベートを進めるのかに関心があったので、試合にも前向きに取り組みました」(幅さん)

幅さんが大きな手応えを感じたのは、「Grand Crossfire」という4人同時に参加して質問・応答、主張・反論を行う3分間でのことだ。幅さんが相手の主張に反論したところ、相手は再反論をしてこなかったのだ。

「相手が沈黙する姿に、自分の立論が正しく、きちんと伝わっているのだと分かりました。英語母語話者である相手をうならせることができて、大きな自信になりました」(幅さん)
 幅さんたちは相手の間違いを冷静

写真3 「大会を通してディベート力、英語力が上がった。臨機応変に対応する力をもっと高めたい」と幅さんは言う。

に指摘し、相手が感情的になっても、それに流されずに理詰めで進めていった。その結果、本選の予選は通過できなかったが、国際部門の予選は3勝し、決勝トーナメントに進出。目標を大きく上回る戦績を残した。

「相手の発言に納得できないことがあっても、相手の主張を正しく理解するために、最後まで話をしっかり聞くようになりました」(幅さん)

ディベートを通して身につけた力を生かし、社会を引っ張る人物になりたいと、幅さんは将来像を語る。

そうした生徒の成長を受けて、小河先生は、英作文の指導で、生徒の考えを揺さぶるような指摘を心がけるようになったと話す。

「自分の考えは絶対的なものではないこと、だからこそ、相手を納得させるには根拠や条件を示す必要があることを強調して生徒に伝えるようになりました。ディベートは、課題を分析し、解決策を論理的に探るといって、これからの社会に求められる力が鍛えられる教育活動であるという認識が、校内に広まりつつあります。生徒の活躍に触発されて、教師の意識も変わろうとしています」